

〔解説〕「地域に根差す」ために求められる信頼関係

古賀氏から説明があったように、現在相模原市内には32の公民館がある。講義では語られなかったが、この数は神奈川県市区町村のうち、横浜市・川崎市を抜いてトップの館数である。その相模原市の中でも最多の利用率である大野北公民館が、地域およびコミュニティについて学ぶ本学部にとって、いかに注目すべき施設であるかはいうまでもない。そしてその数は、古賀氏からも解説された「地域に根差した公民館」という相模原市の公民館の特色を表す要素のひとつといえるだろう。実際に、ほぼすべての公民館ごとにHPが設けられ、独自の館報が発行されている。

大野北公民館から発行されている館報「北公民館だより」もそのひとつで、内容は職員により催されたイベントの紹介だけではなく、住民によって企画・運営された講座や活動についての報告、または参加者や実行委員を募った記事が過半数を占めていることは、着目すべきところのひとつといえよう。例えば、館区内の住民の知識・技能や日頃の学習成果を地域に還元する自主企画提案事業「はやぶさ塾」を開催している。また公民館はそのはやぶさ塾の企画を希望する住民に対し、説明会も行っている。

講義の中で紹介された「ゆめッ子ひろば」では、企画者も参加者も地元の子どもたちで構成されていることにより、子ども同士の交流が生まれるだけでなく、クルー（実行委員）は企画者としてイベントをカタチづくる体験ができる、教育的なプログラムとなっている。

古賀氏の発言にもあるように、「参加者は一方的に受け身で学ぶだけではなく、得た知識や

経験、技術をほかの人に還元するという立場になり得」ること、またそのために公民館は「個人の学びではなく地域の人たちが出会って学んでつながる場」として機能しており、適切な知識や情報を提供することでそれを支援していることがうかがえる。

さて本学部の学生にとって、大野北公民館は大学のある相模原市内での実習先である。身近な舞台において、公民館が住民をどのように意識し、どのような活動を実施しているのかを知る機会となるだろう。

またここでの実習の中で、市の公民館が掲げる「地域に根差す」ということの意味について、改めて検討することになると考えられる。まちづくりやコミュニティ形成をテーマとした際、しばしばこの言葉を目にするようになるが、これが何を意味し、それによって何を目指しているのか。またこの手段が、住民にとってはどのように印象付けられることになるのか。そしてその住民の声を、どのように得ていくのか。地域の状況や課題を把握するにあたり、住民が普段どのようなことに悩み、どのような意見を持っているのか。伊藤准教授からのコメントにもあったように、活動の中で住民からの内面的な声が発せられたとき、それはお互いがどのように関わり、どのような関係が生まれたときといえるだろうか。

相模原市で学ぶ一員として行う地域実習においては、公民館と住民、両者の視点をもってこのことが考察されることを期待している。

（塩月 真布由）